
ジプシー＝ダンス

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ジブシー＝ダンス

【Nコード】

N7617B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

スペインの港町セヴィリアにやって来た主人公。そこで彼は一人のロマニの少女と出会いそして。チェッカーズシリーズ第十九弾です。中期のフミヤさんと鶴久さんのコンビの曲です。

第一章

ジプシーダンス

スペインの港町セビーリア。ここはフラメンコが生まれた音楽の街だ。

俺は今この街に来ていた。理由はない。ただ何となくだ。

日本が面白くなくなったわけじゃない。彼女に振られたからでも気分転換でもない。旅行するなら何処がいいのかと思っただらまたまここが目に入ったからだ。

「スペインなんだ」

行く前に彼女に言われた。

「行くか？」

「ううん、どうしようかしら」

俺の彼女は旅行があまり好きじゃない。この時もさして面白い顔はしなかった。それを見て俺はこの旅行は一人で行くことになるだろうと思った。

その通りになった。パスポートの話になって彼女は言った。

「私やつぱりいいわ」

「行かないのかい？」

「お土産だけ頂戴」

「土産つて言われてもよ」

今一つピンと来なかった。スペインといえば闘牛にフラメンコ、あとは料理にワインだ。何でもオペラ歌手にいいのが一杯いるそうだがそれはあまり興味がない。

「何がいいんだよ」

「土産話でもいいわ」

「じゃあそれだな」

それなら幾らでもありそうだった。俺は快く頷いた。

「それでいいな」

- 「闘牛聞かせて」
- 「それだけでいいのかい？」
- 「バルセロナのことも」
- 「ああ、そりゃ駄目だ」
- 「何で？」
- 「俺が行くのはセビーリアだからな」
- 「スペインなんでしょ、それでも」
- 「スペインでも広いぜ」
- 俺はこう返した。
- 「バルセロナって確かスペインの右端の方だぜ」
- 「そうなの」
- 「それでセビーリアは南の方にあるんだよ。ほらな」
- 地図を広げてわざわざ説明した。
- 「ここがバルセロナで」
- 「ええ」
- 「ここが俺が行くセビーリアだよ。なつ、滅茶苦茶離れてるだろ」
- 「そうね、確かに」
- 「まあ闘牛はあるだろうけれどな」
- 「じゃあその話聞かせて」
- 「わかったよ」
- 土産はこれで決まった。
- 「ついでにパエリアも食べて来るぜ」
- 「ガスパチヨもでしょ」
- 「いいな、それも」
- スペイン料理は好きだ。あの少しワイルドな感じがいい。鰻が多いのも俺の好みだ。そこに赤ワインがあれば言うことはなしだ。
- 「じゃあ楽しんで来てよ」
- 「折角だから来ればいいのによ」
- もう一回誘ったが結果は同じだった。
- 「やっぱいいいわ」

「そうかよ。それじゃあな」
「ええ」

こうして俺は一人でスペインに行くことになった。旅行会社に紹介されたガイドさんと一緒にセビーリアの街を歩いていた。

「この辺りですかね」

口髭を生やした陽気なガイドさんが俺にお喋りな口調で話してくれる。

「フィガロがアルマヴィーヴァ伯爵と会ったのは」

「ええと、フィガロの結婚の話でしたっけ」

「いえ、これはセビーリアの理髪師の話です」

「そうでしたか」

「そうです。登場人物は同じですけれどね」

「何か話がこんがらがりますね」

「そうですか？」

オペラの話に詳しくない俺はどうもしどろもどろであったがガイドさんは違った。朗らかな様子で街を速い足取りで進んで俺に話してくれる。

「さつきから何か色々とおペラの話が出て」

「ここは多くの作品の舞台になっているんですよ」

「それは日本で聞いてましたが」

それでも俺のオペラへの関心と比べてあまりにも多い量だったので覚え切れてはいないのが実状だ。

「まさかこんなに」

「驚かれましたか？」

「カルメンしか知りませんでしたから」

知っていると言っても名前だけだ。流石にこれは知っていた。

「ほう、カルメンですか」

「この街が舞台ですよ」

「その通りです。けれど今はカルメンはいませんよ」

「そうですか？」

見たところ街行く女は皆小柄で黒く波打つ髪を持つあだっばい女ばかりだった。赤や黄色のロングスカートと黒いシャツがやけによく似合う。

「カルメンみたいな女の子は一杯います」
「成程」

「そしてオレンジもね」

見れば至る所にオレンジの木がある。まるで柿の木がそこいらにあるみたいだった。それを考えるとここではオレンジが日本の柿にあたるのだろうか。

「多いですね、確かに」

「どうですか、これから」

ガイドさんはニコリと笑って俺に提案してきた。

「オレンジでも」

「オレンジだけですか？」

「むっ、そういえば」

言われて何かを気付いたようであった。

「もうお昼ですね」

「はい」

「それではシエスタ前に」

ガイドさんは提案してきた。

「昼食といきましょう」

「いい店御存知なんですか？」

「何を仰るお客さん」

妙に愛嬌のある言葉が返って来た。

「スペインですよ」

「はい」

「しかもセビーリア。何が言いたいかわかりますか？」

「いい店があると」

「そう、それも何処にでも」

彼は誇らしげに述べた。

「その中でもね」

「ええ」

自然と話に引き込まれてしまっていた。

「パエリアとステーキが美味しい店がすぐ側に」

「じゃあそこに」

「しかも安い」

「いいことばかりですね」

「スペインはいい国ですよ」

また誇らしげに言ってくれたがやはり嫌味なところはない。ここがスペインの不思議なところだった。

「美人も多いですし」

「じゃあ夜はその美人を教えてもらいますか」

「いいですよ。ただ今は」

「食事を」

「行きましょう。期待は裏切りません」

「では」

こうして俺はパエリアとステーキ、そしてワインを楽しんだ。ガイドさんの紹介してくれた店は確かに美味かった。それで本当に安かった。もうフランス料理なぞ馬鹿馬鹿しくなる程だった。何とガイドさんもそれを俺に聞いてきたのだ。

第二章

「どうですか、セビーリアの料理は」

「お見事」

俺はホテルに帰りながらそれに答えた。

「予想以上でしたよ」

「しかも安かったでしょ」

「あんなに食べたのにね」

もう腹一杯だった。ステーキとパエリアの他にも色々頼んで食べたからだ。

「あれだけで済むなんて」

「フランスとは違いますからね」

この言葉である。

「気取るのは嫌いなんですよ」

「そうですね」

「それで楽しく食べた後は」

「シエスタですね」

「はい、じゃあ私も少し休みますので」

「はい」

俺達は一旦ロビーで別れた。白い大理石の入り口をくぐればそこは何かアラビアンナイトに出て来るみたいなお場所だった。丸いアーチにアラベスクの色とりどりの模様で飾られている。それを見ていると何かスペインじゃなくてアラビアの何処かの国にいるような気分になった。何でもスペインは昔イスラム教徒の勢力圏だったらしくてこうした文化がまだ残っているらしい。spれでも吹き抜けのホールの終わりに見える青い絵はキリスト教のものだった。

「何か変わった感じだな」

俺はワインに酔った頭でそう思った。何かこのスペインの感じに興味が沸いてくるのを感じていた。

「眠くないしな」

シエスタしようという気にもなれなかった。何か他にスペインを
思わせるものはないかと思いだした。

そう考えると何かホテルを出たくなかった。そしてふらりと街に出
てそのまま歩きだした。

街中はシエスタの時間のせいか人がやけに少なかった。黄金色の
太陽の光と白い家々、そして黒い影の中を俺は歩いていった。

オレンジの香りがするのどかな感じの街だった。そんな街中を歩
いているとふと裏通りが目に入った。危ないかなと思ったがそこへ
ふらふらと入って行った。

そこにも誰もいなかった。誰もいない裏通りを一人歩いている。
やはり危ないと思いつり帰ろうとした。その時だった。

「おや」

俺の目に一人の少女の姿が入った。黒く長い髪に浅黒い肌、そし
て情熱的な黒い眼を持つ少女だった。

独特の彫をしていて顔立ちは整っている。白い胸と背中が大きく
開いた上着の上から黒い服を羽織っている。そして赤く長いスカー
トを履いていた。

その姿で踊っていた。何かを忘れるかの様に。ダンスの練習かと
思った。

不意に俺の姿に気付いたのだろうか。動きを止めてきた。

「あつ」

俺はそれを見て何か申し訳ない気がした。といつても日本語が通
じないのはわかっていた。

少女は動きを止めるとそのまま姿を消した。裏通りのさらに小路
に入って行った。後には誰もいなかった。俺は彼女の姿を見失うと
することがなくなった。仕方なく表へ出てセビリアを見て回った。
いい街だったがそれ以上にあの少女のことが心に残った。ダンサー
か何かなのだろうかと考えながらだった。

暫く歩き回ってホテルに戻った。暫く何となくぼうっとしている

とガイドさんがやって来た。

「ゆつくりされましたか？」

「街を見ていました」

「シエスタはされなかつたのですか？」

「どうにも目がさえていて」

俺はあの少女のことは伏せてこう述べた。

「それで」

「左様ですか。けれど気をつけて下さいよ」

「治安ですか？」

「そうですね、ここは日本ではありませんからね」

スペインは今の日本よりも治安が悪い。治安が悪くなったと言っても日本はまだいい方なのだ。スペインはそれと比べるとやはり悪いのだ。

「ひつたくりも多いですね」

「そうなのですか」

「まあそこところは気をつけて下さい」

「ええ。ところで夜は」

「女の子がどうとか言っておられましたね」

「そんなお店ですか？」

「表と裏両方がある場所ですよ」

ガイドさんはそう言うとなやりと笑ってきた。

「これはセニヨリータには決して教えない場所です」

「それでは」

「はい、それです」

ガイドさんは実に流暢な日本語で話してくれた。それにしても本当に日本語が上手い人だと思った。

「宜しいですか。まずはフラメンコ」

「はい」

「それが表で裏は」

「宴と」

「そういうことです。では少ししてから行きましょう」

「少しですか」

「スペインの夜は長いのですよ」

今度は何か思わせぶりな笑みだった。

「何かとね」

「ではまた」

「はい。またワインを楽しみましょう」

「ワインが多いですね」

これには少し驚かされた。

「ワインは情熱の飲み物ですよ」

「いや、それでも」

「スペインは情熱の国。だからこそワインが飲まれるのですよ」

「ではまた」

「そうです。楽しみましょう」

「わかりました。では」

「まあ後でね。ゆっくりと」

俺達はとりあえずは日本のことを話したりして時間を潰した。それが終わってからようやくガイドさんの紹介する店に入った。木と白い壁の店だった。前にステージがある。テーブルに着くとやはりワインが出て来た。肴はチーズに生ハムだった。

第三章

「夜は軽くというわけですか」

「身体を動かさなくてははいけませんしね
「身体を」

「ですからスペインの夜は長いのですよ」

彼はまたそれを言った。

「これからです」

「では」

「はい。まずは乾杯です」

彼はグラスにワインを注ぎ込みながら述べた。

「セビーリアに乾杯」

「乾杯」

俺達は杯を打ち合わせた。それからまずは飲んだ。

「それですね」

ガイドさんは一杯空けてから話を再開した。

「はい」

「この店の名物はまずはフラメンコです」

「それですね」

「粒揃いのダンサーが揃っていまして」

「ほう」

何か楽しみになってきた。

「踊りだけでなく容姿もいい」

「完璧ですね」

「ですよ。ではそろそろです」

踊り娘達が出て来た。そして情熱的な踊りをはじめた。

「どうですか？」

一つ終わったところで俺に声をかけてきた。

「いいものでしょう」

「これが本場のフラメンコなのですか」

「そう、カルメンの踊りです」

彼は笑ってそう述べた。

「違うでしょう、何もかもが」

「日本でもフラメンコをやっている人間はいますよ」

「ええ」

「それでもやつぱり。本場は違いますね」

「生憎ですが情熱に関する限りスペインは特別なのですよ」

「確かに」

心から頷いた。

「これだけのものはないですね」

「そうですね。それでは次は」

「何ですか？」

「ここで今売り出し中の娘が出ます」

「看板ですか？」

「まだそこまでは至ってませんがね。いい娘ですよ」

「そんなにですか」

「カルメンとまで讃えられています」

「そのカルメンに」

「そうですね。さあはじまりましたよ」

早速音楽がはじまった。

「ほら、彼女ですよ」

「あっ」

俺はその彼女を見て思わず声をあげた。

そこにいたのは昼に裏通りで踊っていたあの娘だった。艶やかな顔と白いあの独特のドレスで踊っていた。口には花を横に啜えている。

「どうしました？」

ガイドさんは俺が声をあげたのに気付いて声をかけてきた。

「いや、あれは」

「？」

言おうとしたが思い止まった。それで隠すことにした。

「何でもないです」

「そうですか」

「ただ。凄い踊りですね」

「そうですね。この娘はこれから大物になりますよ」

「セビリアーでしょうか」

「いえ、スペインーになれますね」

ガイドさんはにこりと笑ってこう述べた。

「このままいくと」

「ですか」

「元々彼女はね。ロマニなのですよ」

「ロマニなのですか」

「はい。それもカルメンに似ているでしょう」

「そうですね。小柄ですし」

カルメンは読んだことがある。小柄であだっばい女だ。

「そう、スペイン女は小柄ですよ。ですが」

「その小柄な身体に溢れんばかりの情熱を抱いている」

「おわかりになりますか」

「何か少しずつわかってきました」

俺は言った。

「スペインのことが」

「これでも奥の深い国でしてね」

ガイドさんは俺のこの言葉に気をよくしたのかさらに上機嫌になつてきた。

「スペイン女もまた同じなのですよ」

「成程」

「まあそれのお話は後でね。今は踊りを楽しみましょう」

「わかりました」

俺はそれに頷いて踊りを見ていた。終わると賞賛の声が酒場を包

み込んだ。

その足下にまで賞賛の声と投げ込まれる花が届いている。少女はそれを微笑んで受けていた。

だが言葉は出さない。決して。俺はそこに何か違和感を感じていた。

「あの」

それで俺はガイドさんに尋ねた。

「あの娘は無口なんですか？」

「はい、全然喋らないんですよ」

やはりそうだった。ガイドさんは答えてくれた。

「とにかく無口でして」

「はあ」

「綺麗ですけどね。それで夜では人気がないですね」

「夜で!？」

「ああ、彼女達はそっちの仕事もしているんですよ」

「えっ」

俺はこれには眉を顰めさせた。

「本当ですか、それ」

「まだここにはそういうものがあるんですよ」

ガイドさんは教えてくれた。

「というか日本にもまだあるでしょう」

「噂ではね」

裏の世界にそういうのが残っているとはたまに聞く。何処までが表で何処までが裏か、そして表も裏もその境は曖昧なものでしかないが。

「それと同じですよ。この酒場はそうしたのもやってるんですよ」

「だからですか、さっきのお話は」

「そういうことです。よかったら店の親父と話をしますよ」

俺にこう囁いてきた。

第四章

「一晩。どうですか？」

「考えさせて下さい」

俺はこう返した。

「ちよつとね」

「ちよつとですか」

「こつこのつのは長々と考えても仕方ないでしょう？」

「その通りです」

ガイドさんは我が意を得たと言いたげな顔で笑った。

「では歌と踊りが一通り終わってからまた」

「はい」

まずは歌と踊りに専念することになった。ワインが実に美味しい。

それが終わってからすぐにその話になった。

「それですね」

「さっきの話ですよね」

「はい。どうされますか？」

ガイドさんはまた尋ねてきた。

「行かれますか？」

「ええ」

俺は決断した。相手はもう決めていた。

「わかりました。じゃあ」

「場所は？」

「ホテルまで来てくれますよ」

「サービスがいいですね」

「すぐ側ですからね」

「はあ」

「じゃあ親父と交渉しますね。誰がいいですか？」

「あの娘が」

俺は答えた。

「白いドレスの」

「ああ、わかりました。彼女ですね」

「そうです、彼女です」

「ではそういうことで。お金は」

金の話になり言われただけのものを払った。そして俺はホテルに戻りシャワーを浴びてベッドの上に腰掛けて待っていた。暫くするとチャイムが鳴った。

「来たな」

席を立って扉を開けると彼女がいた。あの黒い上着と赤のスカートで俺を見上げていた。

「どうぞ」

俺は彼女を迎え入れた。そして一晩彼女と過ごした。

その間彼女は一言も話さなかった。表情を変えることなくずっとそのままだった。だが俺はその彼女と一緒にいた。一晩。一晩だが俺は彼女と確かに一緒にいた。

朝になると俺は朝食を二人分頼んだ。もう一人分は間違いなく彼女の分だ。

「いいから」

丁度シャワーを互いに浴びて服を着終えた時に朝食がルームサービスでやって来た。彼女はそれを見て戸惑う顔を見せたが俺はそんな彼女に対して微笑んで言った。

「いいから」

通じないのはわかっているがボーイさんに通訳してもらって彼からも伝えてもらった。少しだが英語がわかる人だったので英語で説明した。話す方も大変だったが。

朝食は簡単なトーストと卵、そしてコーヒーだった。酒浸りだったのでこうした軽い食事が案外よかった。

それが終わってから彼女は頭を下げて部屋を後にした。俺はそれで彼女とは別れたと思った。

「どうでした、昨日は」

待ち合わせの時間になるとガイドさんがロビーにやって来て俺に声をかけてきた。

「中々よかったですでしょう」

「はい」

「いいか悪いかは別にしてああした店もあります」

「それはね」

わかっていた。わかったうえでのことだった。

「じゃあ今日はですね」

「観光を見回るんですね」

「そうですね、今日は忙しいですよ」

「わかりました、じゃあ」

「行きましょう」

俺達はホテルを出た。そして道を進む。

「そこに車置いてますので」

ガイドさんに車まで案内される。そこでふと道の横を見た。

裏通りに通じている。そこに彼女がいた。

ふとそれに気付くと気配からか。あちらも俺に気付いた。そして

俺の方に顔を向けてきた。

そのまま覗き込んできた。だが俺は何も言えなかった。

黒い目と整った顔で俺を見ている。その顔はもう少女の顔には見

えなかった。

「どうしました？」

ここでガイドさんが俺に声をかけてきた。

「いや」

俺はそれには答えなかった。

「何もありません」

そう答えるだけだった。少女のことを言いつもりはなかった。

「そうですね。じゃあ」

「はい」

俺は彼女から目を離してついて行った。それで終わりだった。
スペインの港町の思い出だ。ロマニの少女の。今となっては半分
夢みたいな話だ。けれど本当のことだ。そのことは今でも俺の胸に
残っている。きっと忘れられない。オレンジの香りと共に。

ジプシー＝ダンス 完

2006・10・23

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7617b/>

ジブシー = ダンス

2009年6月19日14時02分発行